

優良蚕種の褒賞

ほうびしょう

群馬県

御題速写

根古屋村 始め

明治四年辛未年五月製作

御国産蚕種上品一等

長野県管下

信州高井郡福島村

養蚕世話役

金一万疋

同断 二等

福島県管下

岩代国伊達郡梁川村

養蚕世話役

金七千疋

同断 三等

群馬県管下

上野国佐位郡島村

金五千疋

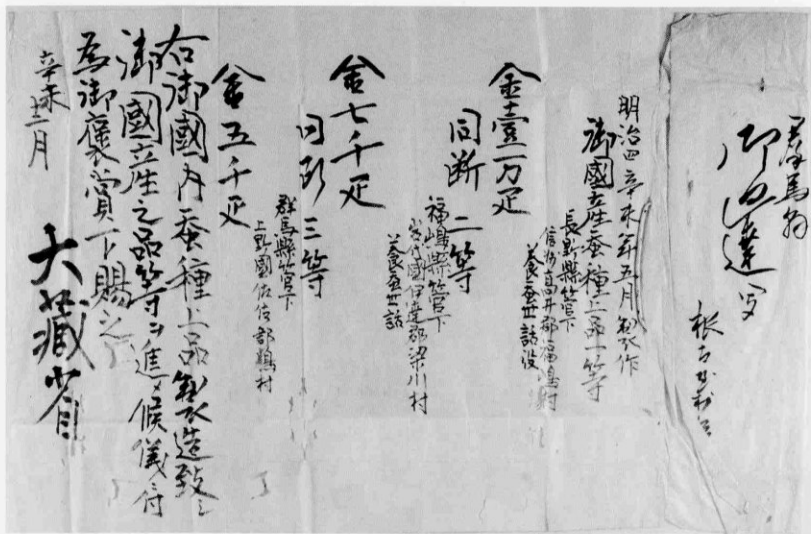
右御国内蚕種上品製造致し

御国産の品等を進め候儀に付き

御褒賞として、これを下賜す

辛未十二月

大蔵省



これは、明治4年(1871)に国産蚕種の品質の良い物を大蔵省が表彰したことが書かれている史料です。群馬県では佐位郡島村(現境町島村)で生産した蚕種が、国産蚕種上品(品質がよいこと)3等に褒賞され、ほうびとして金5000疋をもらったことが記されています。

蚕種とは、蚕の卵を産み付けた紙のことです。これを養蚕農家が買い、孵化させて、蚕を育てて繭にし、製糸業者に売りました。群馬県内では養蚕だけでなく、蚕種業もさかんでした。幕末から明治6年(1873)ころまでは、日本国内で売られただけでなく、外国へも輸出されました。ヨーロッパで蚕の病気が流行したために、病気が広がっていなかった日本の蚕種がよく売れたためです。特に佐位郡島村は県内蚕種の2割を生産し、中心的地位を占めていました。よく売れ大量に生産され、品質が劣る蚕種が増えてきたため、品質のよい蚕種を生産しようとする動きが出て、上の褒賞のようによい品質の蚕種を生産することが奨励されました。ヨーロッパで蚕の病気の流行が収まった明治7年(1874)には、輸出額は減り、蚕種の販売先は国内が中心となっていきました。

〈参考資料〉『群馬県史』通史編8 140～171頁